

版築作業日報

作成者：村上 慧

2024年10月27日



9月24日

2ヶ月ぶりに現場へ。村上勉強堂は植物たちの戦場と化していた。すさまじいほど緑。よくみるとその緑色もひとつひとつ違うし、綺麗だと思えなくもないのだけど、これだけ繁茂されるとひたすらこわい。上昇への欲望。むきだしの命。

というか、なんでうちのところだけこんなにたくさんの種類の草が生えているのか。他の空き地はだいたい2〜3種類の植物たちが覇権を握っているのだが、うちのところだけ戦国時代みたいに、何種類もの草たちが陣地を競い合っている。なぞである。

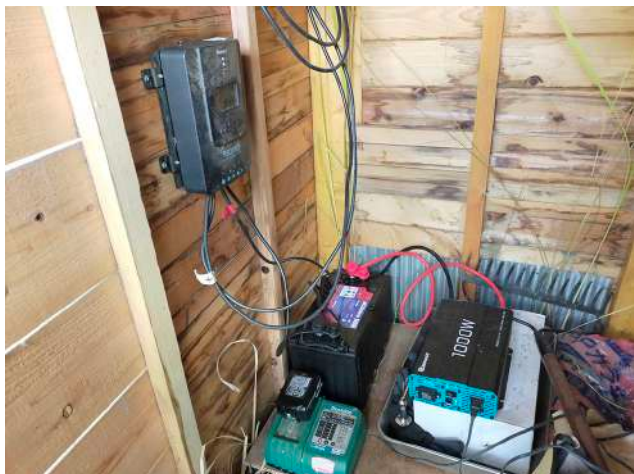
しかし今日、彼らは思い出すだろう。草刈りマンの恐怖を。草たちが種の存亡をかけて戦いを繰り広げているフィールドに、彼らにとってはまったく想定外の、エイリアンとしての私がやってきて、文明の力で破壊の限りを尽くすのだ、などと思いながら草刈りの準備をする。日差しは強いけど、からっとして、気温も26度程度なので、6月と比べて作業のやる気の持続力が全然ちがう。ひとつやり終えても、次をやろうと思える。暑さというのは人のやる気を本当に奪うのだと思う。

15分くらいで切れてしまう草刈り機のバッテリーを5回くらい交換し、敷地全面と、前の道路の草刈りも完了させつつ、倉庫内の整理、発電所の修理及びグレードアップを施した。新しいソーラーパネルと古いパネルを直列で繋いで2枚体制にしたうえで、新しく購入したボート用バッテリーを繋ぎ、チャージコンドローラーも壁に据え付けた。これで安定的に電力が供給されるはずだ。それからトイレ内に繁茂していた草をひっこぬき、本堂周りの草をひっこぬき、明日の版築作業のための型枠をつくり、ずっと放置していたフレコンバッグ内の落ち葉を土に返したところでもう夕方近くになっていた。鼻の調子がよい。

版築作業日報

作成者：村上 慧

2024年10月27日



所が復活したのは本当によかった。バッテリーのせいなのかパネルのせいなのかわからんが、まったく発電しなくなっていた。マキタの充電をまわしたら電圧が少し落ちるが曇りでも充電できる。電気があるのは本当に素晴らしい。

夜は「みぎの湯」へ。風呂が気持ち良すぎて、思わず声が出る。まだまだ明るい空が、薄く雲が張ったなんとも言えない白とも青ともつかない空がきれいだった。さすがに1日草刈り機を振り回していたので腕と背中が筋肉痛みたいだ。特に左腕と背中。

風呂から上がり、休憩室の椅子に座って『存在に耐えられない軽さ』の続きを読む。意識的にでも読書の時間を挟むと1日が長く充実した意味のあるものだという感じが強くなってよい。翻訳のせいなのか原文からなのかわからないけど、ややこしい文体なのに先が読みたくなる不思議な本だ。

レストランのかいテレビ。芸人がいっぱい出てる新幹線のすごさに関する豆知識バラエティ的クイズ番組で日本が世界に誇る！みたいな文句が繰り返され、つらい。なぜつらいのか。誇りがあるのはよいことだが、なぜかつらい。能登の雨被害が大変なことになっている。

<夢日記>

友人のKさんとアーティストのTさんと、チダさんという知らない男性と四人で居酒屋の半個室席っぽい座敷席に座っている。私はTさんにパソコンセット一式（Mac miniとディスプレイとマウスとキーボード）を貸していたのだが、それが実家近くの路上に置き去りにされたまま返されたので、そのことを軽く問い詰める。しかもパソコンは、そばの化粧品店から電源を借りていたので、「電気貸してもらってありがとうございます」とお礼を言い、コンセントを抜くのも私がやった。Tさんいわく、通行人が多いところで使う必要があった、とのことだが、路上に野ざらしで返してしまったことにたいする謝罪はなかった。私はそのことを不満を感じる。そこへまた知らない男性二人がやってきて、席に座る。どうもKさんが東京にきているので、みんなで飲もう、という感じで集まっているらしい。それに気がついたところで目が覚める。

9月25日

1日中、からだにまとわりつくような霧雨が止まず、作業する気になれない。別件のオンラインミーティングがふたつ入っていたので、休憩所でパソコンを開き、携帯電話を使ってインターネットに繋ぎ、ソーラー発電で作った電力で充電しながらディスプレイ越しにミーティングをした。いい時代になったと思う。あとはいくつかメールを返したり、請求書をつくったり、メールを書いたり、本を読んだり、普通に生活をこなしているうちに暗くなってしまった。雨は降り続けているが、ソーラーパネルは発電中のマークがついていて、驚いた。

版築作業日報

作成者：村上 慧

2024年10月27日



こんど「地面がでこぼこしてきちゃう」というタイトルでトークをすることになり、草刈り後のでこぼこした地面に靴を置いて写真を撮ってみた。

<地面がでこぼこしているということ>

村上勉強堂の地面はいつもでこぼこしている。土地を購入してからこのかた、部分的にも平らな状態になったことは一度もないと言ってよい。望んでそうしているわけではない。気がつけば刈り取った植物の山や、地面に残された草の根もと、自分で掘った穴や石などが、敷地全体を満遍なく、すみからすみまででこぼこにしちゃうのである。私は二足歩行の動物で、かつ平らにならされた道路を歩くことに慣れている人間なので、盛り上がりたりへこんだりしている土の上を歩くだけでとても疲れてしまう。

慣れない環境にも関わらず、私のふたつの足首は一步踏みだすごとに角度を変えて対応してくれる。足の裏は危険を察知するのがうまいな、ということがよくわかる。そこに石があれば、体重を乗せる前に着地点を瞬時にずらすこともできる。がんばっているのは足首だけではない。両膝もそれぞれに曲がりたり伸びたりすることで地面の高低差を軽減してくれるし、腕は前後左右に振られることで身体のバランスを整えてくれる。優秀な私の部位たち。なんでそんなにがんばるのか。すべては私という身体を垂直に保つためである。

ここで思い出されることがある。以前、友人に誘われて長野の山に登ったときのこと。そこでも地面は右に左に傾き、私を転ばせようとしてきた。しかし私の身体は（ごく自然に）それに抵抗した。私の膝や足首や腕たちがそれぞれに完璧な仕事をこなし、身体を前へと進ませた。

そのころ私は、大切に進めていたある仕事が事情で立ち行かなくなり、辞めざるをえない状況に追い込まれてしまっていて、とても落ちこんでいた。しかし山道を歩いているうち、徐々に、しかし確実に前向きな気持ちに……というより、でこぼこした地面への対応に追われ、いま目の前に存在しないものごと、つまり過去の後悔や、未来への失望や、ここにいない誰かのことなどについて心配する余裕がなくなった結果、不思議なことに元気になっていた。

つまり結果的に、地面のでこぼこによって私は元気づけられた。むろん地面はただ自然に、石が川に流されていくのと同じように、ただなされるがままでこぼこしているだけなのだが、その上を歩く私にとって、その凹凸ひとつひとつが「いま」という瞬間を意味し、歩くことはそんな「いま」を一步一步で踏みしめる、ということの意味する。同じ歩行でも、平らにならされた道のそれとはまったく異なる体験だ。平坦な道を歩いているときは、身体はそれほど動かない。足首の角度は一定だし、足の裏は何も察知しない。道路とは人間がスムーズに歩くためにつくられた道具なので、当然のことだ。優れた道具は、それを使っていることを人に忘れさせる。つまり私たちは道路を歩くとき、自分が歩いているということを忘れている。

しかし地面がでこぼこしていると事情が変わってくる。「歩いている！」という実感が一步ごとに、足元から強烈に立ち昇ってくるのだ。

私はいま歩いている！

足場が不安定なので、身体の部位たちが絶えずアジャスターのように機能し、私という命を（垂直に）保とうとする。すなわち「歩いている」が「生きている」を意味するのだ。より正確に言えば、歩行それ自体に「生きたい」という、目に見えない意志が宿っている。わざわざ意識はしないかもしれない。しかし歩くだけで確実に、そのメッセージは身体に刻まれていく。これは前向きにならざるをえないではないか。

それからもうひとつ、でこぼこした地面を歩いていると、ときおり窪みに足を取られ、つまづく。村上勉強堂でも、私はよく転びそうになっている。そのとき私の身体になにが起きているか。

それまでに見ていた景色や、今後の作業計画や、お腹が空いたなあ、などといった思考のすべてが瞬間で吹き飛ぶのだ。つまづきそうになったその瞬間、私は自分が持てるすべての力を使い、体勢を立てなおそうとする。手も足もあちこちへ飛んでいって、変な声が出て、はたから見ると非常にかっこわるい。しかし、そんなことにはいっさい構ってられない。目や耳、両腕と両足、私のすべてが一瞬で本気を出し、命を（垂直に）保とうとする。心臓、肺、首、指先までぜんぶである。その集中力たるや。時間も、地球も、過去や未来も、あらゆるすべてがパッと消えてしまい、自分だけになる。そうしてつまづきから立ちなおったとき、私はもはや生まれかわっている。つまづくことはRebornなのである。

でこぼこした地面はそのように、私に命であるという事実を思い出させ、また生まれ変わらせる。

版築作業日報

作成者：村上 慧

2024年10月27日



夜ご飯は久々のアーリウス。オーナーのアセフさんが「ああ、社長！しばらくだね」と迎えてくれた。私の呼び名は「社長」で定着してしまったようだ。

お店はどうですか？ と尋ねたらすぐさま、「ひま！」と言われた。

「ばらばら来るけどね、ひま！」

聞けば隣のショップにはよく買い物客が来るみたいだが、レストランのほうは私の他にもう一組くらい日曜に来る常連がいるくらいで、さっぱりとのこと。この日もいつもどおりがらんとしていた。

いつも通りマトンビリヤニを頼んだら、「ハリーム」という料理をサービスしてくれた。豆と肉と麦を潰してペーストみたいにした料理。「美味しいからたべてみて。これだけでおなかにたまるからナンがいらぬ」という。辛くてうまかった。

<マグマの力>

近所の「山武の森元気館」というところに銭湯があるという情報をネットで得たので、行ってみたのだが、臨時休館で真っ暗だった。なので久々に酒々井の「湯楽の里」へ行ってみた。地下2000mから汲み出した温泉施設である。

なんだかあんまり肉体労働してないのに温泉なんか入っちゃっていいのかなと余計な罪悪感にさいなまれつつも温泉に浸かった瞬間「ぜんぶオッケイ！！」となった。なんか知らんが唐突に色々吹っ切れて、いま参加している北アルプス芸術祭が終わったらそこで使ってた単管パイプが使えるようになるからそれまではパイプは買わずにどうにかあるもので作業を進めようか思っていたのだが、「ヨシ、明日必要なパイプを全部買おう！」となった。「どうせパイプはいつか何かに使えるし、明後日以降また天気が崩れるらしいから明日パイプを使って本堂を丸ごと覆う屋根、つまり屋根オブ屋根を作っておけば雨でも作業できるし日差しも遮れるしきつと作業スピードも上がるので、もうこういうのはお金もつたいないと考えんのやめてさっさとやっちゃおう！ 名付けて屋根オブ屋根計画である」となった。どうせいつ死ぬか分からないし。どうせいつ死ぬかわからない、というのは自分でもあまり好きではないのにたまに発動してしまう貧乏性的根性をどっかにおいやるときには役に立つ。地下深く、マグマの力で熱せられた温泉には人間を大きく構えさせる効能があるらしい。明日、本堂の上にはマグマの屋根オブ屋根が爆誕するであろう。

版築作業日報

作成者：村上 慧

2024年10月27日



9月26日

そしてマグマの屋根オブ屋根は完成した。13時半からのオンラインミーティングの前に終わらせてしまおうと思ったらがんばれた。どうにか一人で高さ3mの単管パイプを4本立て、5mの梁を4本渡し、明日以降作業するであろう型枠の上にブルーシートを、綺麗とは言えないながらもどうにか張り終えた頃に、裏の滝口さんから「村上さん」と話しかけられる。

「ちょっとお願いがあるんだけどね」

このあたりの人はみんな、年に3回くらいは草刈りをしていて、マムシとかもいるから、敷地の端っこの草も刈って欲しい、とのことだった。飛び出した鉄筋に草刈り機の刃が当たるのが嫌だったので、北・南・東側の敷地境界に沿いの草は刈っていなかったのだけど、今後はやったほうがよさそうだ。「マムシ気をつけてね」とも言ってくれた。

土地を買うというのはこういった、場所に対する責任を負うことでもあるのだろう。私はこの土地を売り渡さないかぎり、一生草たちを短く保つ必要がある。この社会はそういったメンテナンスに溢れている。そこらの空き地や草むらはもちろん、道路も定期的に手入れをしないと壊れていく。植物と人間とのせめぎ合いがいたるところで繰り広げられ、その時々でそれぞれの小さな勝利を収めたり、敗北を喫したりしているのだろう。世界は固定されたものではなく、常に商品が補充されることによっていつもモノが並んでいるように見えるコンビニの棚と同じように、絶え間ない流れの中にある。

版築作業日報

作成者：村上 慧

2024年10月27日



17時にmtgが終わり、しかしすぐに作業をする気になれず、たぶん30分くらいぼーっとして、滝口さんに言われた草刈りだけやろうと立ち上がり、バッテリーが切れるまで草を刈り、片付けて、頭も体も使ったせいかぐったりと疲れてしまった。サイゼリヤに行ってわめサラダハンバーグと小ライスと、食後にイタリアンプリンまで食べる。なんだか空腹が深刻にやばいような気がして、自分がいま何を食べているのかなどはいつさえ意識せず、かきこむように食べた。

9月27日



朝から雨がぱらつく。午前中、2時間ほどかけてフネ2杯分の土を作る。午後は雨が本降りになり、夕方には豪雨になっていた。とてもじゃないが作業はできない。あるいは、ゴールデンウィークのときのように人が大勢いたら気合いのできるのかもしれないけど、ひとりではちょっと無理である。車の中で雨の音を聞きながら本を読んだり、ミーティングもひとつこなし。16時には豪雨になっていた。車の中、窓のドアの隙間を空気が通りぬけるような音と共に、ひたすら「ぎー———」という雨の音。

9月28日



制作中なのに、廃墟みたいに見える。何か生まれている過程と朽ちていく過程が同居している。進む時間と戻る時間がこのポイントで拮抗し、せめぎあって、エネルギーとして弾けているような風景。トイレなどはもう築60年みたいな見た目である。

ようやく雨のない日がきてくれたので、朝から一生懸命作業を進めた。お昼すぎまでに4セットこなし。5セット目を終えたところで井戸水が出なくなる。とりいそぎ手持ちのミネラルウォーターを使って6セット目を完了させてから、井戸の部品を交換したら出るようになった。今日1日で30kgx6セット、180kg分の土を壁にしたことになる。

版築作業日報

作成者：村上 慧

2024年10月27日



夜は「みきの湯」へ。右腕と右手が筋肉痛で不便。また味噌カツ丼。くつろぎルームで本を読んだら、入口の自販機のところから、「何飲みたい？」となんだか機嫌の良さそうな女の人の声が聞こえた。子供になにかのみものを買おうとしているようだ。

「モンスター？ モンスターは買わないよ。モンスター飲んだら大きくならなくなっちゃうよ」と諭していて、よかった。

9月29日



午前中すこし土を作って、突き固めを2セット行い、型枠も足した。午後は4セットやって、ようやく完成。

つまり30kgの土+6kgの消石灰の生地を1セットとして、11~12セットやれば壁が1枚完成し、それを一人でやるには土づくりも入れておおむね3日間かかるということだ。

「セット」という言葉を使っていると筋トレをしているような気分になってくる。そしてこの作業には確かに筋トレという側面もある。腕と肩の筋肉はつきそうだ。

このところずっと車中泊&コンビニ食か外食続きだった。そうすると生野菜が食べたくなる。このことを考えるたび、ゴールデンウィークに星野さんがサイゼリヤのことを、野菜を食べるところだと思ってます、と言っていたことを思い出す。

この滞在はのべ一週間はあったにも関わらず、実質作業できたのは二日半だった。前半は天気がぐずつき、作業があまり進まず、しかしオンラインミーティングがたくさんあったので、その対応や、小雨のときは土から有機物を取り除く作業や屋根オブ屋根を作る作業などを進めたが、とはいえ2日、3日と天気が悪い日が続くと徐々に、こんな天気が続いたらいつそ帰った方がいいんじゃないか、と思いはじめた。しかし私はそうしなかった。途中で切り上げなかった。待ってもらっている原稿もあるし、いろいろな事務作業もしなくてはいけない。家に帰ればやることは山ほどある。天気の悪いなか、ここにただらいるよりも、さっさと帰って他のことをやるべきではないか、と何度も思った。しかし私は粘った。そしてある朝、目が覚めたら晴れていた。私は「勝った」と思った。良くも悪くも私はこれまで、この粘りでどうにかやってきた。私はたぶん諦めが悪いほうだし、一度決めたことを覆すことに強い抵抗感がある。しつこい。しかし村上をこの場所につれてきたのは、そんな私だと思う。

文責：村上慧